

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏 名 高橋 知之

本論文は、1840年代のロシア文学について、アレクセイ・プレシチェーフおよびアポロン・グリゴリエフという二人の文学者の作品と思想に焦点を合わせて分析したものである。この時期は近代ロシア文学の歴史の中でも特に重要な転換期とされ、ロマン主義からリアリズムへの移行、スラヴ派と西欧派の対立といった図式で語られることが普通だが、本論文が取り上げたのは、そういった伝統的な二項対立の構図からはこぼれ落ちがちな二人の文学者である。分析の際には、「反省」と「直接性」という二つの概念を軸にして、この二つの極に対して文学者たちがどのように関わったかを考察しながら、従来の図式を相対化し、1840年代の文学的営為を多角的に把握することに成功した。

第Ⅰ部は、若き日のドストエフスキーも参加したいわゆるペトラシェフスキー・サークルの詩人アレクセイ・プレシチェーフの詩作を取り上げ、彼の作品に現われる「預言者」の形象を緻密に分析した。プレシチェーフの預言者は、プーシキンやレールモントフなどのロマン主義的な預言者像を受け継ぎながらも、ユートピア社会主義的な性格を帯びるようになり、サークル内の連帯を前提とする「小さな預言者」たちの共同の人格へと変貌した。

プレシチェーフのこういった詩的営為が反省を脱して直接性を希求する方向性を端的に示すものであったとするならば、本論文の第Ⅱ部で取り上げられるグリゴリエフは、ヴィターリンを主人公とした自伝的小説の三部作などにおいて、反省にとらわれた自己意識から脱しようとはせず、むしろ反省を突き詰めていく道を選んだ。そして彼はそのような過程を経て生まれる「無性格」を様々な文学的形象によって描き出し、自らの生き方を「漂泊」と規定した。1840年代のグリゴリエフの著作は現代ではあまり顧みられなくなっているが、こういった視点からの分析を通じて、この時期が、後の彼の有名な「有機的批評」の立場を準備したという見通しが示されている。

本論文の評価されるべき成果は、主として次の二点にある。

第一に、「反省」「直接性」という二つの軸を導入することによって、19世紀前半のロシア文学史に関する伝統的な構図を批判的に再検討し、西欧派とスラヴ派を統合して見ることを可能にする視点を示した。第二にそのような視点から、プレシチェーフとグリゴリエフという、従来の構図の中では二次的な役割しか認められなかった文学者たちに新たな光を当て、それぞれの作品の文学史的な意義を明らかにした。

野心的な構想のもとに書かれた論文であるだけに、ここに提示されている新たな構図を確立するためには、さらに検討対象を広げながらテキストの読解を続ける必要がある。しかし、大胆な思想史的構想と手堅い実証的テキスト分析を融合させた独創的な試みとして、本論文は19世紀ロシア文学研究の新たな道を切り拓くものである。それゆえ審査委員会は全員一致で、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいとの結論に至った。